

敦煌医書『明堂五藏論』 釈読補訂

六車 楓

はじめに

敦煌医書『明堂五藏論』は「総論」・「肝と胆第一」・「心と小腸第二」・「肺と大腸第三」・「脾と胃第四」・「腎と膀胱部第五」・「結語」の七章からなる臓象説の書である。筆者は修士論文で本文献の釈読・全訳注を行い、従来体系的には明らかにならなかったその成立背景とそこに見える身体観について、医学思想史の観点から検討を行った。

本稿では、修士論文に掲載した「肝と胆第一」から「結語」までの釈読を補訂し、文中のキーワードからその根底にある思想を考察していく。なお、『明堂五藏論』の書誌情報と「総論」の釈読は拙稿「敦煌医書『明堂五藏論』の基本的性質」（『待兼山論叢』第五三号哲学篇、二〇一九年二月、一七―三三頁）を参照されたい。

一 『明堂五藏論』 釈読

本章では、『明堂五藏論』の「肝と胆第一」から「結語」までの釈読を行う。現物資料では一切改行されていないが、本稿では便宜上、章ごとに区切って釈読する。

《凡例》

「」の数字は行数、（）は行間の文字を表す。また、原積文の句読点やかぎ括弧は筆者が適宜附したものである。語注作成時に参考にした注釈本の略称は、以下のとおりである。

- 『考釈』…馬継興主編『敦煌古医籍考釈』（江西科学技术出版社、一九八八年）
- 『全書』…叢春雨主編『敦煌中医薬全書』（中医古籍出版社、一九九四年）
- 『輯校』…馬継興ほか輯校『敦煌医薬文献輯校』（江蘇古籍出版社、一九九八年）
- 『釈録』…袁仁智・潘文主編『敦煌医薬文献真迹釈録』（中医古籍出版社、

二〇一五年)

・『新輯校』…沈澍農主編『敦煌吐魯番醫藥文獻新輯校』(高等教育出版社、

二〇一六年)

① 肝と胆第一

《原文》

肝者竈藏、東方甲乙木、其位〔14〕在震。春王七十二日。肝者幹也。從官三千六百人。生於亥、王於卯、病於〔15〕巳、死於午、墓於未。肝四斤〔四〕兩、左三葉、右四葉、有六童子・三玉女〔16〕首於肝。其形直、其忌庚辛日、其腸奔走、其獸青龍、其畜〔17〕虎兔、其數八、其屬歲星、其神九、其音角、其色青、其兵第一。上通於〔18〕目、內主筋、知目和即能辯五色。左為眼屬甲、右為目屬乙。故知、〔19〕肝熱眼內多眠、肝不足轉筋、爪乾、肝實左脇下痛、肝積氣、如復〔20〕盃在左脇下、肝勞四肢無力、肝病倍明閉目。肝俞在人背第九〔21〕槌兩傍、各相去一寸半是也。肝與膽合、名為清淨之府。膽者敬也。膽〔22〕為將軍、從官三千六百人。膽神六人。膽為貫也。決曹使孫、能怒能喜、能〔23〕罷能屬。膽重三兩三殊、長三寸三分、橫二寸五分、亭精汁三合。故〔24〕知、膽熱晝夜多睡、膽冷無睡多悶、膽風口吐清水。膽愈在背第九槌兩〔25〕傍、各相去一寸半是也。

《釈文》

肝者魂藏、東方甲乙木、其位在震。春王七十二日。肝者幹也。從官三千六百人。生於亥、王於卯、病於巳、死於午、墓於未。肝四斤四兩、左三葉、右四葉。有六童子・三玉女守於肝。其形直、其忌庚辛日、其常奔走、其獸

青龍、其畜虎兔、其數八、其屬歲星、其神九、其音角、其色青、其兵第一。上通於目、內主筋、知目和即能辨五色。左為眼屬甲、右為目屬乙。故知、肝熱眼內多眵、肝不足轉筋、爪乾、肝實左脇下痛、肝積氣、如復盃在左脇下、肝勞四肢無力、肝病倍明閉目。肝俞在人背第九椎兩傍、各相去一寸半是也。肝與膽合、名為清淨之府。膽者敬也。膽為將軍、從官三千六百人。膽神六人。膽為貫也。決曹使孫、能怒能喜、能剛能屬。膽重三兩三殊、長三寸三分、橫二寸五分、停精汁三合。故知、膽熱晝夜多睡、膽冷無睡多悶、膽風口吐清水。膽愈在背第九椎兩傍、各相去一寸半是也。

《書き下し文》

肝は魂の藏なりて、東方甲乙木、其の位は震。春に王^{さか}なること七十二日。肝は幹なり。從官三千六百人。亥に生じ、卯に王^{さか}なりて、巳に病み、午に死に、未に墓す。肝は四斤四兩、左は三葉、右は四葉なり。六童子・三玉女の肝を守る有り。其の形は直にして、其の忌は庚辛の日、其の常は奔走し、其の獸は青龍、其の畜は虎兔、其の數は八、其の歲星に屬し、其の神は九、其の音は角、其の色は青、其の兵は第一なり。上は目に通じ、内は筋を主り、目とせば即ち能く五色を弁するを知る。左は眼と為し甲に屬し、右は目と為し乙に屬す。故に知る、肝熱なれば眼の内眵多く、肝不足すれば轉筋し、爪乾き、肝實なれば左脇の下痛み、肝氣を積^{あつ}むれば杯を復すが如きもの左脇の下に在り、肝勞すれば四肢力無く、肝病めば、明に倍^{そひ}き目を閉じんことを。肝俞は人の背の第九椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。肝と胆と合し、名づけて清淨の府と為す。胆は敢なり。胆は將軍たり、從官は三千六百人。胆神は六人。胆は貫と為すなり。曹を決^{した}し孫^{たが}わしめ、能く怒り能く喜び、能く剛なりて能く屬^{つら}ぬ。胆は重三兩三殊、長三寸三分、橫二寸五分、精汁を停むること三合。故に

知る、胆熱なれば昼夜睡ること多く、胆冷なれば睡ること無く悶うづうること多く、胆風あれば口清水を吐かんことを。胆俞は背の第九椎の兩傍に有り、各おの相い去ること一寸半是れなり。

《現代語訳》

肝は魂を蔵し、東方甲乙木に属し、その位は震である。春に（肝の気が）七二日間盛んになる。肝は幹である。従官は三六〇〇人。亥に生じ、卯に盛んになって、巳に病み、午に死に、未に墓葬する。肝は四斤四兩、左は三葉、右は四葉である。六童子・三玉女が肝を守っている。その形はまっすぐであり、庚辛の日を忌み、常に奔走し、獸は青龍、畜は虎兔で、数は八であり、歳星に属し、神は九（人）、音は角、色は青、兵を第一とする。表面は目に通じ、内部は筋を主り、目と調和がとれて初めて、五色を理解することができる。左は眼であり甲に属し、右は目であり乙に属す。それゆえ（次のような症状が出れば肝の調子が）分かる、肝が熱であると眼の内に目やにが多く、肝（の気）が不足すればけいれんし、爪が乾き、肝が実であれば左脇の下が痛み、肝が氣をため込むと、杯をひっくり返したようなものが左脇の下にでき、肝が勞すれば四肢は力がなくなり、肝を病むと、明るいとこを避けて目を閉じるようになる。肝俞は背の第九椎からそれぞれ兩側に一寸半離れたところにある。肝と胆は対応し、（胆を）名づけて清淨の腑という。胆は敢である。胆は將軍であり、従官は三六〇〇人。胆神は六人。胆は貫という。下級役人を治めて順わせ、怒り喜び、剛健であつて付き従うことができる。胆は重さ三兩三銖、長さ三寸三分、横幅は二寸五分で、胆汁を三合溜める。それゆえ（次のような症状が出れば胆の調子が）分かる、胆が熱であれば昼夜に寝ることが多く、胆が冷であれば眠らず憂ふしいが多くなり、胆に風邪ふうじやがあれば口から胆汁を吐く。胆俞は背

の第九椎からそれぞれ兩側に一寸半離れたところにある。

② 心と小腸第二

《原文》

心尙小腸第二。心者臟也。所誠臟物微、無事〔26〕不貫。心為帝王。監・令四方、従官三千六百人。受氣於巳、生於乙、王於庚、病於〔27〕癸、死於申。心重十二〔兩〕、中有三毛七孔、状如鷄子形。心熱舌上生瘡、心冷痰逆〔28〕惡心。心俞在人背第十一槌兩傍、各相去〔一〕寸半是也。心尙小腸各、各為水〔29〕穀之腑。腸者暢也、又名水曹。長二丈四尺。按二十四氣定血脉、和利精神。〔30〕故知、小腸熱即便澁如金色、小腸冷即便澁如白色、腸盛即陽道生瘡。〔31〕小腸俞在人背第十一槌兩傍、各相去一寸半是也。

《釈文》

心与小腸第二。心者織也。所識織微、無事不貫。心為帝王。監・令四方、従官三千六百人。受氣於己、生於乙、王於庚、病於癸、死於甲。心重十二兩、中有三毛七孔、状如鷄子形。心熱舌上生瘡、心冷痰逆惡心。心俞在人背第十一椎兩傍、各相去一寸半是也。心与小腸合、名為水穀之腑。腸者暢也、又名水曹。長二丈四尺。按二十四氣定血脉、和利精神。故知、小腸熱即便澁如金色、小腸冷即便澁如白色、腸盛即陽道生瘡。小腸俞在人背第十一椎兩傍、各相去一寸半是也。

《書き下し文》

心と小腸第二。心は織なり。識る所織微にして、事として貫かざるは無

し。心は帝王たり。監・令四方、従官三千六百人。気を己に受け、乙に生じ、庚に壬なりて、癸に病み、甲に死す。心は重十二兩、中に三毛七孔有り、状は鷄子の形の如し。心熱なれば舌上に瘡生じ、心冷なれば痰逆して悪心なり。心愈は人の背の第十一椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。心と小腸と合し、名づけて水穀の腑と為す。腸は暢なり、又た水曹と名づく。長二丈四尺なり。按ずるに二十四氣は血脈を定め、精神を和利す。故に知る、小腸熱なれば即ち便澁の金色の如く、小腸冷なれば即ち便澁白色の如く、腸盛んなれば即ち陽道に瘡生ぜんことを。小腸愈は人の背の第十一椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。

《現代語訳》

心と小腸第二。心は織である。細かなことを感じ取り、心を貫かない物事はない。心は帝王である。監・令(が)四方(にあり)、従官は三六〇〇人。気を己に受け、乙に生じ、庚に盛んになって、癸に病み、甲に死ぬ。心は重さ一二兩、中に三毛七孔があつて、形は卵のようである。心が熱であれば舌の上に瘡が生じ、心が冷であれば痰が逆流して気分が悪くなる。心愈は背の第十一椎からそれぞれ兩側に一寸半離れたところにある。心と小腸は対応し、(小腸を)名づけて水穀の腑という。腸は暢であり、水曹ともいう。長さは二丈四尺である。思うに、二十四氣は血脈を定め、精神を調和安定させる。それゆえ(次のような症状が出れば小腸の調子が)分かる、小腸が熱であれば尿が金色のようになり、小腸が冷であれば尿は白っぽく、腸(の氣)が盛んであれば陰茎に瘡ができる。小腸愈は背の第十一椎からそれぞれ兩側に一寸半離れたところにある。

③ 肺と大腸第三

《原文》

肺局大腸第三。(32) 肺者傍也。肺為華蓋、又為丞相。肺重三斤三兩、六葉二耳、外連於鼻、(33) 内主於皮。故知、肺風鼻塞、腦疼、肺熱即皮上生瘡。肺愈在人背第(34) 十三椎兩傍、各相去一寸半是也。肺局大腸合、名為行道傳送之府。長(35) 一丈二尺、象十二月。故知、大腸熱即肛門生瘡、大腸冷即脱肛下痢。大腸愈(36) 在背第十三椎兩傍、各相去一寸半是也。

《釈文》

肺と大腸第三。肺者傍也。肺為華蓋、又為丞相。肺重三斤三兩、六葉二耳、外連於鼻、内主於皮。故知、肺風鼻塞、腦疼、肺熱即皮上生瘡。肺愈在人背第十三椎兩傍、各相去一寸半是也。肺局大腸合、名為行道傳送之府。長一丈二尺、象十二月。故知、大腸熱即肛門生瘡、大腸冷即脱肛下痢。大腸愈在背第十三椎兩傍、各相去一寸半是也。

《書き下し文》

肺と大腸第三。肺は傍なり。肺は華蓋たり、又た丞相たり。肺は重三斤三兩、六葉二耳、外は鼻に連なり、内は皮を主る。故に知る、肺風あれば鼻塞がりて脳疼み、肺熱なれば即ち皮上に瘡生ぜんことを。肺愈は人の背の第十三椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。肺と大腸と合し、名づけて行道伝送の府と為す。長一丈二尺、十二月に象る。故に知る、大腸熱なれば即ち肛門に瘡生じ、大腸冷なれば即ち脱肛下痢せんことを。大腸愈は背の第十三椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸

半是れなり。

《現代語訳》

肺と大腸第三。肺は傍である。肺は車を覆う傘であり、また丞相でもある。肺は重さ三斤三両、六葉二耳で、外側は鼻とつながっており、内側は皮膚を主る。それゆえ（次のような症状が出れば肺の調子が）分かる、肺に風邪があれば鼻が詰まって頭が痛み、肺が熱であれば皮膚に瘡ができる。肺愈は背の第一三椎からそれぞれ両側に一寸半離れたところにある。肺と大腸は対応し、（大腸を）名づけて行道伝送の腑という。長さは一丈二尺で、一二ヶ月になぞらえている。それゆえ（次のような症状が出れば大腸の調子が）分かる、大腸が熱であれば肛門に瘡が生じ、大腸が冷であれば脱肛して下痢をする。大腸愈は背の第一三椎からそれぞれ両側に一寸半離れたところにある。

④ 脾と胃第四

《原文》

脾与胃合、受盛之府。脾者裨也。〔37〕為言裨助胃氣。故知、脾熱唇乾生瘡、脾冷不思飲食。脾愈在人〔背〕第八〔38〕槌兩傍、各相去一寸半是也。胃者為也。長二尺〔四〕寸、受水穀三斗五升、當流二斗〔39〕四升為滿、以應二十四氣。定血脉、和利精氣〔神。是胃之精〕。胃愈在人背第十八槌兩傍、各相去一〔40〕寸半是也。

《釈文》

脾与胃合、受盛之府。脾者裨也。為言裨助胃氣。故知、脾熱唇乾生瘡、

脾冷不思飲食。脾愈在人背第八椎兩傍、各相去一寸半是也。胃者為也。長二尺四寸、受水穀三斗五升、當留二斗四升為滿、以應二十四氣。定血脉、和利精神。是胃之精。胃愈在人背第十八椎兩傍、各相去一寸半是也。

《書き下し文》

脾と胃と合し、受盛の府たり。脾は裨なり。言たるは胃氣を裨助するなり。故に知る、脾熱なれば唇乾きて瘡生じ、脾冷なれば飲食を思わんとを。脾愈は人の背の第八椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。胃は為なり。長二尺四寸、水穀を受くること三斗五升、當に留むること二斗四升にして滿と為すべく、以て二十四氣に應ず。血脉を定め、精神を和利す。是れ胃の精なり。胃愈は人の背の第十八椎の兩傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。

《現代語訳》

脾と胃とは対応し、（胃を名づけて）受盛の府（という）。脾は裨である。胃氣を補助するという意味である。それゆえ（次のような症状が出れば脾の調子が）分かる、脾が熱であれば唇が乾いて瘡ができ、脾が冷であれば飲食をしようと思わなくなる。脾愈は背の第八椎の両側にあり、そこからそれぞれ一寸半離れたところにある。胃は為である。長さは二尺四寸、食物を受けとめること三斗五升、留めること二斗四升到相当する量を以て滿杯とすることができ、二十四氣に対応する。血脉を定め、精神を調和安定させる。これは胃の働きである。胃愈は背の第一八椎からそれぞれ両側に一寸半離れたところにある。

⑤ 腎と膀胱部第五

《原文》

腎与膀胱部第五。腎与膀胱合、名為命門之府。腎者引也。為言引〔41〕水穀、和利精神。故腎實耳聾、腎風耳鳴、種痒。耳為腎司。腎重一斤二兩。腎為〔42〕烈女。左右各一枚。腎俞在人背第十二椎兩傍、各相去一寸半是也。

《釈文》

腎与膀胱部第五。腎与膀胱合、名為命門之府。腎者引也。為言引水穀、和利精神。故腎實耳聾、腎風耳鳴、種痒。耳為腎司。腎重一斤二兩。腎為烈女。左右各一枚。腎俞在人背第十二椎兩傍、各相去一寸半是也。

《書き下し文》

腎と膀胱部第五。腎と膀胱と合し、名づけて命門の府と為す。腎は引なり。言たるは水穀を引き、精神を和利す。故に腎実なれば耳聾し、腎風あれば耳鳴し、種痒す。耳は腎司たり。腎は重一斤二兩。腎は烈女たり。左右各おの一枚。腎俞は人の背の第十二椎の両傍に在り、各おの相い去ること一寸半是れなり。

《現代語訳》

腎と膀胱第五。腎と膀胱は対応し、(膀胱を)名づけて命門の腑という。腎は引である。食物を引き入れ、精神を調和安定させるといふ意味である。それゆえ、腎が実であれば耳が聞こえなくなり、腎に風邪があれば耳鳴り

がして、腫瘍ができる。耳は腎司(腎が司る器官)である。腎は重さ一斤二兩。腎は烈女である。左右それぞれ一枚ずつある。腎俞は背の第十二椎からそれぞれ両側に一寸半離れたところにある。

⑥ 結語

《原文》

又言、上醫察色、〔43〕中醫聽音、下醫診候。醫者意也。須明胫脉、善會方書、又會陰陽、是名〔44〕三代醫也。明堂五藏論壹。

《釈文》

又言、上醫察色、中醫聽聲、下醫診候。醫者意也。須明経脈、善會方書、又會陰陽。是名三代醫也。明堂五藏論壹。

《書き下し文》

又た言う、上医は色を察し、中医は声を聴き、下医は症候を診る。医は意なり。須く経脈に明るく、善く方書を会し、又た陰陽を会すべし。是れ名づけて三代の医なり。明堂五藏論一。

《現代語訳》

またこのように言う。上医は色を観察し、中医は声を聴き、下医は候を診る。医は意である。経脈に明るく、方書や陰陽をしつかりと理解しておくべきである。これを名づけて三代の医という。明堂五藏論一。

本章では、前章での釈読を踏まえ、篇ごとに思想上重要な語句や釈読の困難な部分を中心に解説し、『明堂五藏論』に見える思想的特徴を探る。

① 肝と胆第一

まず、肝と胆第一から見ていこう。

「肝者魂藏」とは、肝が魂を蔵するということを示す。これは伝統的な中国医学思想に見える考え方で、例えば『黄帝内経素問』（以下『素問』）六節蔵象論には「岐伯曰く、「中略」肝は、極むるを罷むるの本にして、魂の居るところなり。「後略」と（岐伯曰、「中略」肝者、罷極之本、魂之居也。「後略」）」とある。また、『難経』三十四難には「五藏に七神有り、各おの何所に蔵さるるや。然り。蔵は人の神気の舍り蔵さるる所なり。故に肝は魂を蔵し、肺は魄を蔵し、心は神を蔵し、腎は精を蔵し、脾は志を蔵す（五藏有七神、各何所藏耶。然。藏者、人之神氣所舍藏也。故肝藏魂、肺藏魄、心藏神、腎藏精、脾藏志）」とあり、五臓は精神活動を主導する「神」が蔵されていると考えられた。この「神」は魂・魄・神・精・志の諸精神活動の代名詞としての「神」である。人間はこの「神」を有することにより、正常に活動することができる。

肝と結びつけられた「東方甲乙木」「其數八」「歳星」「其音角」は、全て五行の木に当てはまるものであり、伝世の医学書のみならず、『白虎通』などにも見える普遍的な思想である。古くから方位・季節・五行・臓は結び付けられており、例えば、『黄帝内経靈枢』（以下『靈枢』）陰陽繫日月に「黄帝曰く、「五行は東方を以て甲乙・木・春に王んと為す。春は蒼色なりて、

肝を主る。「後略」）」と（黄帝曰、「五行以東方爲甲乙・木・王春。春者蒼色、主肝。「後略」）」と、『素問』金匱真言論に「岐伯曰く、「中略」東方は青色なり。入りて肝に通じ、目を開竅し、精を肝に蔵す。その病驚駭を發し、其の味は酸、其の類は草木、其の畜は鶏、其の穀は麦。其の四時に応ずるは、上を歳星と為し、是を以て春氣頭に在るなり。其れ音は角、其れ數は八。「後略」）」と（岐伯曰、「中略」東方青色。入通於肝、開竅於目、藏精於肝。其病發驚駭、其味酸、其類草木、其畜雞、其穀麥。其應四時、上爲歳星、是以春氣在頭也。其音角、其數八。「後略」）」とある。

「肝者幹也」とは、後漢・劉熙撰『釈名』釈形体に「肝は、幹なり。五行は木に属す。故に其の体状枝幹を有するなり。凡物大なるを以て幹と為すなり（肝、幹也。五行屬木。故其體状有枝幹也。凡物以大爲幹也）」とあることに基づく表現と考えられる。『釈名』の述べる通り、肝の形を大きな幹に見立てていたのである。

「從官三千六百人」が具体的に何を指すかは不明であるが、北宋の道教類書『雲笈七籤』卷一八所収の『老子中経』（成立は四世紀半ば〜五世紀頃）第二三神仙に「肝神七人。老子は君なり。名づけて明堂宮蘭台府と曰う。其れ從官三千六百人なり（肝神七人。老子君也。名曰明堂宮蘭臺府也。其從官三千六百人）」とあり、これと何らかの関係があるように思われる。

また、「其神九」という表現も理解しがたいが、右の『老子中経』の言う「肝神七人」のようなものであろうか。『老子中経』の「肝神」とは体内神のことであり、筆者はこれを踏まえ、『明堂五藏論』も「肝神が九人」と述べていると捉えた。加えて、後文の「膽神六人」の伝世文献における用例も管見の及ぶ限りでは見つからなかったが、『雲笈七籤』卷一八所収の『老子中経』第二三神仙には「胆神は五人、太一道君なり。紫房宮に居る。五彩の玄黄・紫蓋・珠玉・雲氣の車に乗じ、六飛龍に驂駕す。從官三千六

百人なり（膽神五人、太一道君也。居紫房宮。乘五彩玄黃・紫蓋・珠玉・雲氣之車、驂駕六飛龍。從官三千六百人）」とある。六朝時代には「存思」、すなわち五臟六腑や髪などのあらゆる部位に宿る体内神、および太陽や月などの自然に宿る体外神を思い眺め、身体の気の流れを巡らせたり溜めたりして、それらに長生を願うという思想が多く、道教經典で説かれた『明堂五藏論』の肝神や胆神もそれらの流れを受けたものと推測できる。

「生於亥、王於卯、病於巳、死於午、墓於未」は、肝の気の巡りを相生説により説いている。十二支と五行の関係からすると、亥は水、卯は木、巳・午は火、未は土である。『淮南子』天文訓にも「木は亥に生じ、卯に壮んにして、未に死す。三辰は皆な木なり（木生於亥、壯於卯、死於未、三辰皆木也）」という類似の記述がある。

「膽者敬也」は、原文では「膽者敬也」のように見える。この敬字の解釈は注釈者によって異なるが、本稿では敬字とする。『輯校』『全書』は原文のまま敬字で解釈し、『釈録』は敬字と同音の浄字で解釈している。『新輯校』は、この句が声訓であることに着目し、敬字を散字で読むべきとする。しかし、いずれの場合も文意が通らないように思われる。『新輯校』の述べる通り、この句は声訓であろうから、『輯校』『全書』『釈録』の説は膽字と音通せず、不適である。また、『新輯校』は膽字と散字で韻が踏めるものとしているが、『広韻』に基づくと膽字は敬韻、散字は早韻であるため、この二字は韻を踏み得ない。

ここで筆者は、以上の説とは別に、敬字に読み替える試案を提示したい。まず漢字音の観点から見ると、敬字は敬韻であるから、膽字と明らかに韻が踏め、声訓として何ら問題はない。さらに、字形の面から考えても、敬字を敬字とすることができると思われる。原文では敬字のように見えるが、他の敦煌文書の中には、敬字と敬字の字形が非常に似ているものがあつた。

例えば、P. 4917『切韻』がそれである。ここで、P. 3655（注1）とP. 4917（注2）『切韻』を比較してみよう。



P.3655『明堂五藏論』
「膽者敬（敬？）也」



P.4917『切韻』
覽字の反切解説部分
「視。慮敬反。三。」

そもそもP. 3655とP. 4917は、同一人物が筆写したものであるか不明であり、字形が似ているかどうかの判断はあくまで筆者個人の主観によるものでしかないので、字形を比較しただけで、安易に敬字に読み替えることは危険である。しかしながら、右の二例を比べても、筆者の書き方によつては、敬字が崩れて敬字のように見える場合があるということが明らかになったであろう。これを踏まえると、『明堂五藏論』の筆写者が別本を見て書き写したとすれば、参照した別本の当該字がもともと敬字のような形をした敬字であつて、筆写者はそれを敬字と誤認してしまった可能性も考えられはしないだろうか。

また、「膽者敬也」「膽者浄也」「膽者散也」の用例は伝世文献に見られないが、「膽者敬也」は金の総合医学書『儒門事親』などに見えることから、「膽者敬也」という表現は、『明堂五藏論』を初めとする複数の文献に共通するものであると言えよう。以上より、筆者は当該箇所を「膽者敬也」と読む。後文で胆は將軍とされており、これは勇敢なさまを表していると考えられる。「膽者敬也」という表現は、こうした將軍のイメージをも窺わせている（注3）。

ちなみに、「膽為將軍」と同様の表現は、『千金要方』胆腑方・胆腑脈論にも見られ、胆は「將軍と号し、曹吏を決す（號將軍、決曹吏）」るものとされている。『素問』靈蘭秘典論においては肝が將軍で、胆は中正の官と見なされており、これは『明堂五藏論』や『千金要方』とは異なる。

最後に「肝与膽合、名為清淨之府」について述べる。胆を「清淨之府」と見なす文献には『難經』三十五難の他、『王叔和脈訣』が挙げられる。『王叔和脈訣』は西晋の医者・王叔和に仮託されたと言われる診脈書で、五言あるいは七言の歌訣方式が取られている。この診候入式歌には「肝胆同ともに津液府と為す、能く眼目に通じて清淨と為す（肝膽同爲津液府、能通眼目爲清淨）」とあり、その北宋・劉元賓注は「經曰く、胆は清淨の府なり（經曰、膽者清淨之府）」（注4）と述べる。『黄帝内經』では胆を「清淨之府」としないことも併せて考えると、『明堂五藏論』の当該部分は『難經』の記述を踏まえたものと言ってよいであろう。『王叔和脈訣』に関しては成立過程が判然とせず、『明堂五藏論』との前後関係が不明であるため（注5）、必ずしもどちらかがどちらかを引用したとは限らない。しかしながら、『明堂五藏論』も『王叔和脈訣』も胆を「清淨之府」とする同系統の理論を採用した可能性は極めて高い。

以上、肝と胆第一の主要語句について説明した。続いて、心と小腸第二に移る。

② 心と小腸第二

まず「心者織也。所識纖微、無事不貫」についてである。『輯校』『積録』は原文の織字を識字とするが、織字・識字共に、伝世文献において心と結びつけられておらず、意味も通らない。また『全書』は、原文の織字を釈

文でもそのまま採用しているが、これもまた文意が不明である。『新輯校』は、『積名』積形体に「心は、織なり。識る所は織微にして、物の心を貫かざる無きなり（心、織也。所識纖微、無物不貫心也）」とあることを根拠に原文の織字を識字に改めている。さらに、この『積名』の記述をもとに原文の識字を識字と、織字を微字と見なして、「所識纖微」と読める可能性を指摘している。このように読むと意味が明解になるため、本稿でも『新輯校』に従い、校訂した。

「受氣於己、生於乙、王於庚、病於癸、死於甲」は、原文では「受氣於己、生於乙、王於庚、病於癸、死於申」となっているが、このまま読むと十干と十二支が混在していて理解しがたい。肝にも類似の文章があったが、そちらは十二支で統一されており、それを踏まえると、この文章は十干で揃えても問題ないであろう。よって、原文の巳字を己字に、申字を甲字とする。なお、伝世文献に同文は見られなかった。

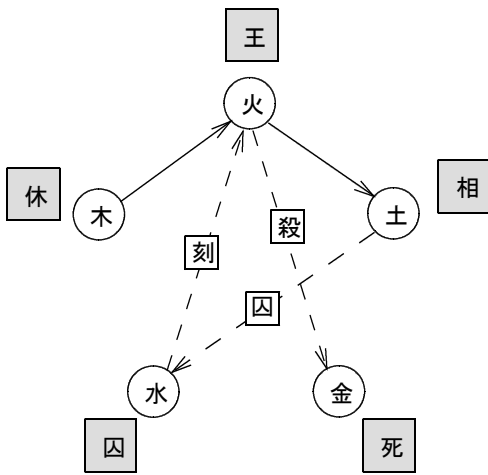
この部分は、相生説・相剋説のどちらの理論も当てはまらない。既存の五行理論の中では、相生説と相剋説を組み合わせた休王説に最も近い規則性を有しているように思われる。一般に休王説は、『五行大義』論四時休王に「五行の休王と体する者は、〔中略〕夏則ち火は王、土は相、木は休、水は囚、金は死（五行體休王者、〔中略〕夏則火王、土相、木休、水囚、金死）」とあるように、「王」「相」「死」「囚」「休」（火土金水木。夏の場合）の五つの役割を五行に配当し、季節ごとの五行の力関係を表すものである（次頁・図一）（注6）。『明堂五藏論』では、その特徴である「休」「相」「囚」という語が用いられていないため、当該部分を休王説と同一視してよいのかは疑問が残る。

ただ、休王説と類似の理論を説く全ての文献が、『五行大義』の五つの役割を採用しているというわけではない。例えば夏の場合、『脈経』心小腸部

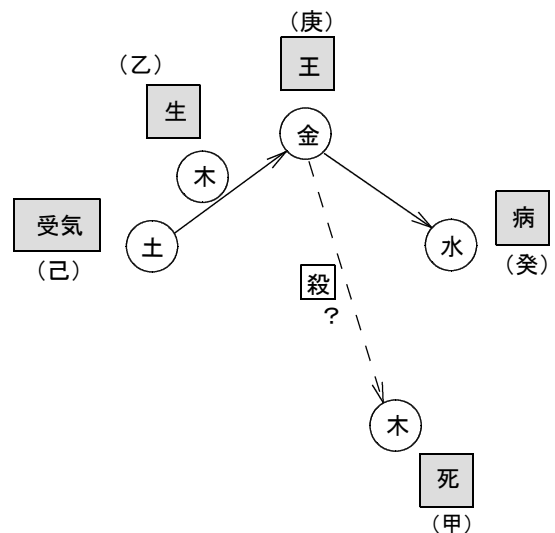
では「心は火に象り、小腸と合して腑たり。〔中略〕其の相は春三月、王は夏三月、廢は季夏六月、囚は秋三月、死は冬三月（心象火、與小腸合爲腑。

〔中略〕其相春三月、王夏三月、廢季夏六月、囚秋三月、死冬三月〕、すなわち「王」「廢」「囚」「死」「相」（火土金水木）とされ、『淮南子』墜形訓では「火壯にして、木老い、土生じ、水囚われ、金死す（火壯、木老、土生、水囚、金死）、すなわち「壯」「生」「死」「囚」「老」（火土金水木）とされており、両文献では休王説であることが明言されているわけではないものの、その考え方自体は休王説に極めて近い。これらの異なる表現を、休王説のバリエーションと見なしてよいかは精査が必要であるが（注7）、休王説が一つの表現・理論で固定されたものではなく、比較的柔軟な理論であるとするならば、『明堂五藏論』で「受氣」「生」「王」「病」「死」とされているのも、休王説の影響をある程度受けたものと考えられはしないだろうか。

『明堂五藏論』の当該記述にあえて休王説の思想を見出すならば、己二土、乙二木、庚二金、癸二水、甲二木であり、次のような関係図で示すことができる（図二）。



〈図一〉『五行正義』
夏の休王相関図



〈図二〉『明堂五藏論』
十干相関図

『明堂五藏論』には火がなく、五行全てが揃っていない点、土と金の間に木が挟まれている点は理解しがたく、完全に休王説に則しているとは言えない。しかしながら、乙の木を除くと土金水の相生説が読み取れ、金が王で木が死という関係は、まさに金が木を殺すという相剋説に匹敵しており、それら二つを合わせた休王説の片鱗が窺えよう。

「心与小腸合、名為水穀之腑」については、他の臓の表現から、原文の各字も『輯校』の訂正のとおり、それぞれ合字・名字とするのが妥当である。「水穀」とは飲み物・食物のことで、『素問』五藏別論に「岐伯曰く、「胃は水穀の海にして、六府の大源なり。〔後略〕」と（岐伯曰く、「胃者水穀之海、六府之大源也。〔後略〕」）とあるように、「水穀之腑」は一般的に胃を指す。小腸は、例えば『靈樞』本輸に「岐伯曰く、「〔中略〕心は小腸に合す。小腸は、受盛の府なり。〔後略〕」と（岐伯曰く、「〔中略〕心合小腸。小腸者、受盛之府。〔後略〕」）とあるように、一般的には「受盛之府」と言われる。

『王叔和脈訣』にも「心と小腸とは受盛と為す（心與小腸爲受盛）」とあり、『明堂五藏論』とは異なる。他の医書の記述を踏まえると、『明堂五藏論』の筆者が誤記した可能性もあるが、ここでは原文を尊重して「水穀之腑」のままに解釈する。

最後に、「腸者暢也、又名水曹」について述べる。まず「腸者暢也」と類似的表現は、『釈名』積形体に「腸は暢なり。胃氣に通暢し、滓穢を去るなり（腸、暢也。通暢胃氣、去滓穢也）」とあり、これは、肝と同じく『釈名』に基づく記述と考えられる。「水曹」とは、唐代の水部の異称で、これを腸と関連づける例としては、『千金要方』膀胱腑方・膀胱腑脈論の「膀胱は津液の腑なり。水曹と号す（膀胱者津液之腑也。號水曹）」が挙げられる。

以上、心と小腸第二の主要語句について説明した。続いて、肺と大腸第三に移る。

③ 肺と大腸第三

まず「肺者傍也」について、管見の及ぶ限り、伝世文献に同様の記述はなく、傍字と同義の旁字・側字なども調査したが、類似表現も見つけられなかった。筆者が考えるに、『集韻』卷六に「傍、左右也」とあるとおり、肺の形が左右対称であることを表現しているのであろう。

「肺為華蓋」の華蓋は天子の傘、蓋であり、その見た目・用途に肺が心（帝王）を覆う様子を重ね合わせていると思われる。このような例えは医学書で一般的に用いられ、『素問』痿論には「岐伯曰く、「肺は蔵の長なり、心の蓋と為すなり。〔後略〕」と（岐伯曰、「肺者藏之長也。爲心之蓋也。〔後略〕」）とある。

最後に、「肺与大腸合、名爲行道傳送之府」についてであるが、『靈樞』

本論には「岐伯曰く、「〔中略〕肺は大腸に合す。大腸は伝道の府なり。〔後略〕（岐伯曰、「〔中略〕肺合大腸。大腸者傳道之府。〔後略〕」）とあり、『王叔和脈訣』診候入式歌には「大腸肺と共に伝送と為す（大腸共肺爲傳送）」とある。「伝道」も「伝送」も飲食物を外へ運ぶという大腸の役割を比喩的に表現しているのであろう。『明堂五藏論』は『王叔和脈訣』と同じ「伝送」を用いており、当該部分には両書に共通する医学理論が認められる。

以上、肺と大腸第三の主要語句について説明した。続いて、脾と胃第四に移る。

④ 脾と胃第四

まず、「脾与胃合、受盛之府」についてである。胃を「受盛之府」とする伝世文献は見られない。一般的に「受盛之府」と称されるのは小腸であり、胃は『靈樞』本論の「岐伯曰く、「〔中略〕脾は胃と合す。胃は五穀の府なり。〔後略〕」と（岐伯曰、「〔中略〕脾合胃、胃者五穀之府。〔後略〕」）という記述や、『難経』三十五難の「胃は水穀の府なり（胃者水穀之府也）」という記述のとおり、一般的に「五穀之府」「水穀之府」などとされる。『王叔和脈訣』は「脾胃相に通じ五穀消ゆ（脾胃相通五穀消）」と言い、劉元賓もやはり「経曰く、胃は水穀の府なり（経曰、胃水穀之府）」と注している。これらの記述に鑑みると、『明堂五藏論』の筆者が誤記した可能性もあるが、ここでは原文を尊重して「受盛之府」のままとする。

「脾者裨也」の裨字は「補助する」の意である。他の臓と同じく、『釈名』積形体に「脾は、裨なり。胃の下に在りて胃氣を裨助し、穀を化するを主るなり（脾、裨也。在胃下裨助胃氣、主化穀也）」とあるのを受けた表現であろう。

「和利精神。是胃之精」について、『新輯校』は、「和利精神」の四字が本文献で定型句として用いられていることを根拠に、原文の「和利精気神是胃之精」の気字を省き、「和利精神。是胃之精」で解釈すべきとする。本稿もこれに従う。

以上、脾と胃第四の主要語句について説明した。続いて、腎と膀胱部第五に移る。

⑤ 腎と膀胱部第五

まず「腎与膀胱合、名為命門之府」についてである。『難経』三十六難には「腎の両つあるは、皆な腎には非ざるなり。其の左なる者を腎と為し、右なる者を命門と為す。命門は、諸もろの神精の舍る所、原気の繋る所なり。故に男子は以て精を蔵し、女子は以て胞に繋く。故に腎に一有るを知るなり（腎兩者、非皆腎也。其左者爲腎、右者爲命門。命門者、諸神精之所舍、原氣之所繋也。故男子以藏精、女子以繋胞。故知腎有一也）」とあり、ここで言う左右とは、陽と陰の比喩である。膀胱は『靈枢』本輸において、「岐伯曰く、「〔中略〕腎は膀胱と合す。膀胱は津液の府なり。〔後略〕」（岐伯曰、「〔中略〕腎合膀胱。膀胱者津液之府也。〔後略〕）」とされているが、『明堂五藏論』は『難経』三十六難の記述のとおり、「神精の舍る所」である腎と対応することを踏まえ、膀胱を「命門之府」としたのであろう。なお、『王叔和脈訣』は「膀胱と腎と合して津慶と為す（膀胱腎合爲津慶）」と言うが、劉元賓の「経曰く、膀胱は津液の府（経曰、膀胱者津液之府）」という注に基づくと、「津慶」は『靈枢』の記述と同義であると考えられる。これは『明堂五藏論』とは異なる解釈である。

「腎者引也」は、『积名』积形体の「腎は、引なり。腎は水を属し、水気

を引きて諸脈に灌注するを主るなり（腎、引也。腎屬水、主引水氣灌注諸脈也）」という記述を受けた表現であろう。「肝と胆第一」から「腎と膀胱部第五」までの記述をまとめると、肝・心・小腸・脾・腎の五つの臟腑は、『积名』に基づくと思われる声訓により、その特徴が説明されていた。

以上、腎と膀胱部第五の主要語句について説明した。続いて、最後の結論に移る。

⑥ 結語

「上醫察色、中醫聽聲、下醫診候」の原文の詠字は未詳文字であるが、『考积』などに従い、診字とする。「診候」は、脈をうかがって病状を知ることである。上医・中医・下医については、『千金要方』論診候に「古の善く医と為る者は、上医は国を医し、中医は人を医し、下医は病を医す。又曰く上医は声を聞き、中医は色を察し、下医は脈を診る。又曰く上医は未だ病まざるの病を医し、中医は病まんと欲するの病を医し、下医は已に病むの病を医す（古之善爲醫者、上醫醫國、中醫醫人、下醫醫病。又曰上醫聽聲、中醫察色、下醫診脈。又曰上醫醫未病之病、中醫醫欲病之病、下醫醫已病之病）」とある。『千金要方』以前にも良い医者条件については言及されており、例えば『素問』陰陽応象大論には「岐伯曰く、「〔中略〕善く診る者は、色を察し脈を按じ、先ず陰陽を別つ。清濁を審らかにして部分を知る。喘息を視、音声を聴きて苦しむ所を知る。〔後略〕」（岐伯曰、「〔中略〕善診者、察色按脈、先別陰陽。審清濁而知部分。視喘息、聽音聲而知所苦。〔後略〕）」とある。以上の伝世文献の記述と照らし合わせてみると、詠字を診字と読み替えられることは明らかである。

伝世文献の記述のみならず、字形の面から見ても、読み替えは可能であ

る。諺字の異体字の一つとして諺字が挙げられるが、この傍の「尔」と諺字の傍である「亦」の異体字とは非常に近い。例えば、敦煌文書P・2160『摩訶摩耶經』では「亦」の異体字である「𠄎」(注8)が使われており、「尔」のように見える。おそらく、『明堂五藏論』の筆写者は諺字のつもりで、形が似ている諺字を記したのであろう。

「醫者意也」という表現は『明堂五藏論』のみならず、医学書や医者之列伝等に多数見える。史書であれば、『後漢書』郭玉伝に「対えて曰く、医の言たるは意なり。腠理微に至り、氣に随いて巧を用う。針石の間は毫芒にして即ち乖き、神心手の際に存す。解くを得べくして言うを得べからざるなり」と(對曰、「醫之爲言意也。腠理至微、隨氣用巧。針石之間毫芒即乖。神存於心手之際。可得解而不可得言也」)とあり、医術は自ら体得するしかなく、言葉で伝えられるようなものではないという。医書であれば、例えば『千金要方』論診候には後漢の医者・張仲景の語として引かれている。

おわりに

以上、肝と胆第一から結論までの積読を行い、重要な語句について解説してきた。その中で、『明堂五藏論』は『黄帝内経』や『千金要方』などに見える基本的な中国医学思想を踏まえつつ、伝世文献とは一部異なる声訓を用いて臓腑の役割を説明していたことが明らかになった。また、道教の特徴的な身体観である体内神の思想も見られたが、その人数は、伝世の道教經典に記されたものと違っている。これらの伝世文献との細かな差違については、『明堂五藏論』がP・3655のみの孤本である以上、他の写本

や伝世文献との比較ができず、当時の医者にとって一般的な思想であったか確認しがたい。しかし、医学も道教も多様な治療法や養生法が認められ、比較的柔軟な思想であることを考えると、『明堂五藏論』の声訓や体内神の記述もまた、当時の豊富な身体観のうちの一つとして見なすことができよう。

その一方で、結語部分にはあらゆる文献に登場する有名な言葉が挙がっていた。小曾戸洋氏が指摘するように、これらの言葉が敦煌医書にも記されていたということは、それらが定型句として広く知られていたことを物語っている(注9)。「明堂五藏論」は、当時の医学思想だけでなく、定型句の流布状況を示しているという点でも重要な文献なのである。

注

- (1) 画像は *Gallica* (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b83002364/f4.item>, [r=pe11iot%203655](https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b83002364/f4.item)) のものをトリミングした。
- (2) 画像は *Gallica* (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8301011x>, [r=pe11iot%204917?rk=21459;2](https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8301011x)) のものをトリミングした。
- (3) 敬字が敬字である可能性については、鳥羽加寿也氏(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)にご指摘いただいた。厚く御礼申し上げます。
- (4) 底本には、国立公文書館蔵『新刊通真子補註王叔和脈訣』(明・成化五年本)を使用した。
- (5) 水溜亮一氏は、多岐元胤撰『医籍考』がその作者を五代の高陽生と見なしていることを妥当とする(水溜亮一『王叔和脈訣』の書誌について、『日本医史学

雑誌』第六一巻第一号、二〇一五年三月、四七頁)。一方、蔡忠志・郝保華両氏は、最初に成書されたのは唐代半ば頃で、後人が自分たちの用いている音韻に従って語を微調整したり、唐代半ばから宋代の医学的内容を増補したりした可能性を指摘する(蔡忠志・郝保華『王叔和脈訣』思探——以「五臟」歌為研究中心』、『中医藥雜誌』二五巻S期、二〇一四年十二月、二二四頁)。『王叔和脈訣』は、P. 3655の『七表八裏三部脈』、『青烏子脈訣』との関連性がより強いため、『王叔和脈訣』の成立や『明堂五藏論』を含むP. 3655との関係については、稿を改めて検討する。

(6) 図の作成にあたっては、加藤千恵「相い雑わること錦のごとし——「術」の五行」(三浦國雄編『術の思想：医・長生・呪・交霊・風水』、風響社、二〇一三年)、四七頁の図を参考にした。

(7) (注6) 前掲書、四九頁。

(8) 画像は Galllica (<https://galllica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8301773f/f9.item.r=pe11iot%202160>) のものをトリミングした。

(9) 小曾戸洋『中国医学古典と日本——書誌と伝承——』(第二版、塙書房、二〇〇五年)、六二七頁。

参考文献

- ・石田秀実『気・流れる身体』(平河出版社、一九八七年)
- ・加藤千恵『老子中経』内丹の源流』(秋岡英行・垣内智之・加藤千恵『煉丹術の世界——不老不死への道』、大修館書店、二〇一八年、一〇四〜一二〇頁)

六車 楓(むぐるま・かえで)

一九九五年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。専門は中国医学思想史。共著に『中国思想基本用語集』(湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇二〇年三月)、主要論文に「敦煌医書『明堂五藏論』の基本的性質」(『待兼山論叢』第五三号哲学篇、二〇一九年十二月)、「中井竹山の歴史観と元号観と——『草茅危言』巻之一「年号ノ事」を手掛かりに——」(『懐徳』第八八号、二〇二〇年一月、共著)など。